関西国際大学研究紀要
第7号,2006年,115～124

シニア世代による子育て支援の実践

～加古川市「にこにこオープンルーム」を事例として～

How Senior Citizens Support Child - Rearing ?

－ From the Survey in the City of Kakogawa －

清　水　美知子＊
Michiko SHIMIZU

抄　録

本稿では、シニア世代による子育て支援の実践について，加古川「にこにこオープンルーム」を事例にとりあげ考察する。同市では2001年，子育て相談センターが60歳以上の市民を対象に，子育て支援のボランティア講座を開いた。その講座の修了生がスタッフとして参加しているのが，「にこにこオープンルーム」である。2002年4月より月に2回，乳児とその親を対象に行われる活動には毎回数十組の親子が参加し，好評をはくしている。この事例を通して，シニア世代がボランティアとして子育てにかかわる意義を明らかにするとともに，子育て支援のあるべき方向性について示唆する。

1．は　じ　め　に

近年，少子高齢化や女性の社会進出などを背景にして，祖父母（シニア）世代と孫世代の関わりを積極的に推し進めようという声が高まってきた。シニア世代のパワーを子育てならぬ孫育てに活かそうという動きも見られる。とはいうものの，どのような関わりが望ましいのかといえば，返答に窮してしまう人が少なくない。

シニア世代による子育てというと，かつては，祖父母が血縁関係にある孫の世話をする，というイメージが強かった。たしかに，三世代同居世帯においては今でも，祖父母は少なからず孫の子育てに関わっている（清水美知子『〈孫育て〉をめぐる祖父母のライフスタイルに関する実証的研究：平成13－15年度科学研究費補助金研究成果報告書』2005年）。近居の場合でも，祖父母は親たちにとって，いざというときに心頼みになり，保育機関でカバーしきれない部分やマニュアル通りにいかない部分を補ってくれるという有り難い存在なのである（兵庫県家庭問題研究所『地域における子育て支援についての調査研究報告書』2003年）。

しかし，核家族化が進むなか，祖父母と孫が1つ屋根の下で暮らすケースは少なくなりつつある。

＊　関西国際大学人間学部

筆者が12年前，兵庫県内の幼稚園・保育所に通う親を対象におこなった調査でも，孫と同居する祖父母はすでに3割弱にとどまっていた（兵庫県家庭問題研究所『祖父母と孫の関わりに関する調査研究報告書』1994年）。祖父母と孫が同居して関わりをもつ子育て支援のスタイルは，もはや一般的とはいえない。

筆者はかねてより，孫育てを血縁関係にある祖父母と孫にとどまらず，子育てを終えたシニア（祖父母）世代が孫世代にかかわるという，“世代間交流”の視点でとらえ直す必要があると考えてきた。シニア世代のパワーを子育てに活かす場合は，血縁の枠から出たほうが，世代間のしがらみが少なくスムーズに運びやすいからである。

本稿では，シニア世代がボランティアとして血縁関係にない孫世代と関わり，親世代の子育ての支援をおこなっている加古川市の事例をとりあげる。シニア世代が子育て支援にたずさわるようになった経緯と，活動に関わるシニア・ボランティアたちの意識について明らかにしたい。

2．兵庫県加古川市の調査から

2．1　加古川市の子育て支援

加古川市は，兵庫県の南西部に位置し，神戸の中心部まで電車で約30分ということもあり，住宅地として開発が進む地域である。人口はおよそ26万6千人，世帯数は約9万5千世帯となっている（2000年国勢調査による）。

神戸のベッドタウンということから，子育て中の世帯も多く，同市ではかねてより「子育て支援」に力を入れてきた。その中核となっているのは，市の子育て相談センターである。

子育て相談センターには37の子育てサークルが登録されており（2002年1月現在），子育て相談センターや地域の公民館などを拠点に自主的な活動をおこなっている。自主サークル以外にも，「なかよし親子ルーム」「親と子のすこやかクラブ」「ママとベビーのおしゃべりサロン」などの子育て教室が，市の主催により運営されている。子育てサークルのメンバーは「かこがわ子育て応援団」という組織をつくっており，口コミ情報誌「にこにこナビ」も発行している。市の主催する講演会や講座に「託児サービス」が必要な場合，登録している応援団のメンバーがボランティアとしてたずさわることも多いという。

2．2　祖父母世代向けの子育て講座の開設

加古川市子育て相談センターでは，親世代を対象とした講座にくわえ，2001年，祖父母世代を対象にした子育て講座を企画した。「初めての孫育て講座」と銘打った講座の募集チラシには次のような宣伝文が書かれている。

最近の子どもたちの現状を顧みて，『子育て』は親だけでは，もはや難しい時代になりました。今こそ，祖父母の方々の豊かな経験と智恵をお借りすべきだと思います。そこで今回，子育てにおける祖父母の役割を学んだり，乳幼児とその母親とふれ合ったりすることにより，“現代の子育て”について学び，それを孫育て又は地域における子育ての教育に発揮していただきたいと考えます。

同講座の開設にあたっては，筆者もかかわっている。県の家庭教育の会合でしばしば顔をあわす同市子育て相談センターの両親教育インストラクターＩさんに，祖父母世代を対象にした講座を開かないかと持ちかけていたのである。

講座は2001年の10月にスタートし計５回，月１回のペースで開かれた。定員20名に対しそれを上回る25名が登録した。図１は同講座のチラシである。

図１にも示されるとおり，筆者も講座の初回に講師として参加した。受講生は，幼い孫のいる人やこれから孫が生まれるという新米の祖母世代のみならず，40代の弟夫婦に近々子どもが産まれるのでその育児にかかわりたいという50代のシングル女性，孫が高校生になり手がかからなくなったので今後は地域の子育て支援にかかわりたいという60代女性など，さまざまな人が参加していた。

図２は，筆者の担当講義（講演会）の目次である。「子育てにおける祖父母の役割」という題目で，今どきの子育て事情や親世代とのつきあい方について，受講生との対話形式で会を進めた。ちなみに，この講座は男性にも門戸を開いていた。しかし，応募してきた

平成13年度　初めての孫育て講座〈祖父母の出番〉

最近の子どもたちの現状を顧みて、「子育て」は親だけでは、もはや難しい時代になりました。今こそ、祖父母の方々の豊かな経験と智恵をお借りすべきだと思います。

そこで今回、子育てにおける祖父母の役割を学んだり、乳幼児とその母親とふれ合ったすることにより、“現代の子育て”について学び、それを孫育て又は地域における子どもの教育に発揮していただきたいと考えます。

(1) 10月24日(水) 講演会『子育てにおける祖父母の役割』
時間　13：30～　　関西国際大学短期大学部助教授
場所　青少年女性センター　302号室　　清水　美知子先生

(2) 11月　7日(水) 沐浴・おむつ交換の仕方(実習)　家庭内の事故・病気について　　加古川市役所健康福祉課 母子保健係長
時間　10：00～　　有馬　富子先生
場所　青少年女性センター　和室

(3) 12月12日(水) 子どもの食事とおやつ(実習)　　加古川市役所児童福祉課 栄養士
時間　10：00～　　宮永　孝子先生
場所　青少年女性センター　調理室

(4)　1月18日(金) 子育てサークルと交流　　加古川市子育て相談センター 両親教育インストラクター
時間　10：00～　　石堂　美紀代
場所　青少年女性センター　201号室　　養田　三智子

(5)　2月22日(金) 楽しい遊びとディスカッション
時間　10：00～
場所　青少年女性センター　大会議室

〔参加費〕　無料（材料費などは実費）
〔定　員〕　20名
〔問い合わせ〕　加古川市子育て相談センター　☎ 54－4188　Fax 54－4190

図１　加古川市子育て相談センター「初めての孫育て講座」

子育てにおける祖父母の役割
目　次

1．はじめに－「おばあちゃん」になったら
2．「おばあちゃん」入門
　・なぜ、子どもには祖父母が必要か
　・今のおばあちゃんは昔のお婆ちゃんとは違う
　・おばあちゃんは便利屋さんではない
3．親世代とのつきあい方
　・子育てをめぐる世代間のトラブル
　・親世代の言い分、祖父母世代の言い分
　・お互いの距離感に違いはない？
　・ルールを決めて、大いにケンカすべし
4．おわりに－子育てにおける祖父母世代の役割
　・「正しい」教育方法などない
　・接するすべての人が、孫にはお手本になる
　・孫を唯一の生きがいにしない

図２「初めての孫育て誇座」講演会の目次

のは全員が女性。そのため，講義の内容もあえて「おばあちゃん向け」としたのである。

この講座のもようは，図3に示されるように「人生の知恵発揮を　生かせ！おばあちゃんパワー」という見出しで新聞にもとりあげられた。

講座のユニークさ，目新しさが好評をはくしたため，子育て相談センターでは翌々年の2003年より「子育て支援シニアボランティア講座」と名前を変え，対象を60歳以上に限定して再び講座を開いた。同センターの両親教育インストラクターＩさんによれば，名称を変更したのは，前回の講座では，年齢層が40代前半から60代後半まで広く対象をつかみにくかったのと，講座参加への理由が「自分の孫の子育てに生かしたい」「ボランティアで子育て支援がしたい」など受講生によりまちまちであったという反省をふまえ，今回は受講生を①シニア層に限定して祖父母世代の〈孫育て〉という性格を前面に打ち出す，②講座で学んだことを「子育て支援」という形で社会で活かしてもらう，という点をクリアにしたからだったという。

もっとも，名前が変わったからといって，講座の内容も変わるわけでなない。図4は「平成15年度　子育て支援シニアボランティア講座」の進行表である。講義と実技，それに幼児とその母親との交流という形は踏襲されている。

2002年（平成14年）1月21日　月曜日

生かせ！おばあちゃんパワー

ユニーク孫育て講座

女性の社会進出で

人生の知恵発揮を

唯一の生きがいにしないで…

図３　「孫育て講座」の紹介記事

7月17日（木）	講演「みんなで子育て・楽しい子育て」 清水美知子（関西国際大学助教授）
8月28日（木）	講演と実技「健康な体をめざして」 永井純子（関西大学・武庫川女子大学講師）
9月19日（金）	子育てサークルとの交流 市両親教育インストラクター
10月23日（木）	実習「子どもが楽しめる遊びと手品」 かこがわ子育て応援団
11月28日（木）	「乳幼児の発達と家庭内の事故・病気について」 市保健師

図４　子育て支援シニアボランティア講座」

筆者はこのリニューアル・オープンした子育て支援講座でも初回の講演「みんなで子育て・楽しい子育て」を担当した。この講演会は「かこがわ子育て応援団」（子育てサークルの連合組織）リーダー研修会も兼ねていたことから，祖父母世代のシニア層のみならず親世代の20代，30代の母親たちも集まり，子育てについての日ごろ感じていること，考えていることを述べ合うという形で進行した。母親のなかには子育ての悩みを涙ながらに訴える者もおり，それに対してシニア世代が自らの失敗談や成功談などにもとづき応える，という一幕も見られた。

同講座の定員は30名であったが，それを大幅に上回る応募があり抽選をとらざるを得なかったという。受講生にインタビューしたところ，「受講後，子育て相談センターのボランティアとして登録していただきます」という文言に目を引かれた，と答える人が多かった。

市町村がおこなうこの種の講座には，学んでもそれが活かせる場ががない，いわゆる「やりっぱなし」講座が少なくない。同センターでは，翌2004年より同講座の修了生（前回の「初めての孫育て講座」の修了生も含む）をボランティア・スタッフとして，子育てオープン・ルームを新規事業として立ち上げることにした。同講座が人気をはくした最も大きな要因は，子育て支援にかかわりたいシニア層に目に見える形で活動の場を用意したためだと思われる。

2．3　「にこにこオープンルーム」の開設

2004年3月24日，加古川市の青少年女性センターで，講座の修了生がボランティア・スタッフとして活動する，子育て相談センター主催の第1回「にこにこオープンルーム」が開かれた。同センターではすでに，母親と1～5歳の幼児を対象とする「ふれあいオープンルーム」の活動をおこなっていた。しかし，「ふれあいオープンルーム」が予約制（毎月曜日開設，午前・午後それぞれ25組に限定）をとるのに対し，「にこにこオープンルーム」のほうは予約なしで，0～5歳の乳幼児とその保護者であれば誰でも自由に参加できる。

オープン初日は，好天に恵まれたうえに春休みに入っていたこともあり，121組の親子（祖父母と孫も数組あり）が来室し，予定していた部屋では入りきらず，急きょ，もう1部屋を開放した。

筆者もこの日，参与観察のためにオープンルームを訪れた。スタッフとして参加したシニア・ボランティアはおそろいのエプロンをつけた11名。この日に向けて，念入りな打ち合わせと準備を進めていたという。

開設時間は1時間半。そのうち1時間は，オープンルーム内のおもちゃ（ボールプールや積み木，輪投げ，ままごとセット，人形，絵本など）を使って自由に遊ぶフリータイムである。出入り自由なので知り合いを捜しにもう一部屋に移る親子，おしゃべりに花を咲かせる母親のグループ，無心にままごとに興じる親子など，いろいろである。母親が目を離しても，子どもはシニア・ボランティアが面倒をみてくれるので安心。幼稚園が春休みということもあり，複数の子どもを連れてきている親が少なくなかった。

45分が過ぎたころ，ボランティア・スタッフのリーダーが片づけを指示し，全員でおもちゃ等の撤収を始める。人数が多かったため10分以上かかったであろうか。一段落ついたところで，特別ゲストとしてかこがわ子育て応援団のサークル「パンダママ」の2人が登場。絵本の読み聞かせを始めた。熱演ぶりに一同は本に釘付け。拍手喝采で終わったところ，間髪を入れず紙テープを使った手品が始まった。プロはだしの腕前に，あちこちから「すごい！」との歓声があがる。最後に，ボランティア・スタッフの指導のもと親子が「ひげじいさん」などの手遊びをする。母親やおばあちゃん世代のスタッフに抱かれて，子どもたちの顔がみるみる笑顔になっていくのが手に取るようにうかがえた。次回のオープンルームの予告をして，すべてのプログラムが終了したのは15：00を15分ほど過ぎたところ

であった。

親子を送り出し，後片づけをしたところで子育て相談センターの両親教育インストラクター二人を交えて，スタッフ・ミーティングが始まった。予想以上の盛況ぶりに，シニア・ボランティアたちもいささか興奮気味。予約制をとらず参加者の人数が読めないことから，次回（４月第１週の水曜日）も２部屋用意したほうがよかろう，ということになった。次回は，「にこにこ」スタッフによる紙芝居と手遊び，その次（４月第３週の水曜日）はトイレット・ロールの芯とビニール袋，紙コップ，セロテープを使ったロケットを作り，飛ばして遊ぼうということに決まった。日誌などをつけ，お開きになったのは16：30を回っていた。

図５　にこにこオープンルームの実施風景

２．４　子育て支援活動を始めて

「にこにこオープンルーム」の子育て支援ボランティアとして登録したのは，先の講座の受講生のうち12人。孫と同居するのは１人だけで，他は孫はいても別居しているか，まだ孫のいない人ばかり。なかには出産・子育ての経験を持たない人もいる。

その１人Ｓさん（64歳）は次のように語る。「自分が子育ての経験がないので，最初はできるかしら…と不安でした。でも，先生（＝筆者）が講演会で，“私も子育ての経験がないけれど，そんなの関係ないと思う，楽しいよ！”とおっしゃっていたので，思い切って飛び込みました。月に２回，１時間半だからかもしれませんが，子どもって本当に可愛い！こちらも幸せな気分になれます」。

Ｔさん（68歳）は，兵庫県の高齢者大学「いなみ野学園」出身。大学のクラブ活動ではハンドベルをやっていた。「いなみ野を卒業したら地域でボランティア活動をやりたいと思っていました。子育て支援ボランティアの講座があることを知り，“これだ！”と飛びつきました。そのうち子どもたちに，ハンドベルの演奏を聴かせてあげたいですね」。

Ｔさんの願いは早くも数カ月後に実現した。他のボランティアの数人が彼女の指導のもとハンドベルを学び，７月第２週のオープンルームのさい，「たなばたさま」など数曲を演奏したのである。同年12月のオープンルームでもクリスマス・ソングを披露し，好評をはくしたとのことである。

ところで，シニア・ボランティアのなかには，このオープンルーム以外にもボランティア活動をおこなっている人もいる。

Hさん（67歳）は月２回，市内の公民館で育児サークルのサポーターとして参加している。「私以外にも講座の修了生がいますよ。こちらで覚えたことが向こうでも活かせるし，そんなに負担は感じません。楽しいですよ」。

リーダー格のYさん（63歳）も，高齢者を対象にしたボランティア活動も行っている。「フルタイムで働いていた頃とはまた違った意味で忙しいけれど，充実した毎日です。にこにこスタッフに登録してから，子育てにみならず子どもの全般の問題に関心を持つようになりました。歌や手遊びももっと覚えたいし，いくら時間があっても足りません」。

結婚以来ずっと専業主婦だったというSさん(62歳)は，活動を始める前は，保育士や看護士の資格も持たない「ただの主婦」である自分に何ができるのだろうかと不安だった。しかし，活動を始めると，その不安が取り越し苦労だったことに気がついたという。

「ただ赤ちゃんを抱いていてあげるだけでもいいんですね。お母さんは四六時中子どもと一緒にいるから，子どもを見てもらえて，お母さん同士がおしゃべりできるだけでも嬉しいんだなあと，接していて改めて感じました。私も子育て真っ最中のときは，きっと同じような思いをしていたんでしょうね。特別な技術や能力がなくても，お役に立つことはたくさんあるんだと実感しました」。

これらシニア世代に共通するのは，子どもに接することを心より楽しんでいることであろう。筆者も当初は「参与観察」という名のもとにオープンルームの活動に関わったのであるが，幼い子どもや親たちに接しているうちに，研究を超えて楽しんでいる自分がいることに気がついた。「子どもたちと一緒に遊べて楽しいし，親たちからも喜ばれる。だからこのボランティアはやめられない」。そう答えたシニア世代の言葉を思い出した。

ただ一方的に面倒をみる，親世代を助けるというのではなく，活動を通してシニア世代も心が満たされ，幸せな気分になれる。それが子育て支援ボランティアの大きな魅力であり，継続のパワーになるのであろう。

3．お　わ　り　に

3．1　次世代育成の視点を

シニア世代の子育てというとこれまで，おもに血縁関係にある祖父母の孫への関わりに焦点が当てられてきた。しかし，核家族化・小家族化がすすんだ今日，自分の孫に関わる機会を十分に持てない祖父母も少なくない。

人生80年・90年の時代，自分の孫の子育てが一段落ついたのち，さらに他人の子育てに関わりたいという人もいる。さらに，晩婚化・未婚化が進行するにつれて，自分の孫を持たないまま生涯を送る人も増えてくると思われる。

シニア世代の子育て支援というと，自らの子育て経験を活かすというイメージが強い。そのようなイメージで捉えると，子育て支援の担い手は，自らが子どもを産み育てた人，すなわち育児経験のある女性に限られる。子育てに直接的にたずさわってこなかった多くの男性やシングルの女性，既婚でも子どもを持たない女性は対象とならない。

たとえ孫がいて近くに住んでいたとしても，子育て観や育児方針のズレや人間関係の確執から，子育てに関われるとは限らない。あるファミリーサポートセンターの会員研修会に講師として参加したさい，１人の援助会員と筆者との間で次のようなやりとりがあった（清水美知子「親子関係，会員同士の人間関係で悩んで居おられる方いらっしゃいませんか～子育てをめぐる人間関係を考える」にしのみやファミリーサポートセンター主催「フォロー研修」2003年8月25日）。

会員：「近所に幼稚園の孫が住んでいるのですが，母親（息子の妻）が孫に関わらせてくれないのです。塾には通わせ稽古事もいくつも習わせて…。私はもっと遊ばせたらと思うのですが。これってどうにかならないでしょうか？」

筆者：「お嫁さんにそのようにおっしゃったらいかがですか？」

会員：「私の言うことを聞くような嫁ではありません。孫にもっと関わりたいけれど，させてもらえないんです。」

筆者：「ならば，よそのお子さんのお世話にもっと力を入れてはいかがすか。」

「血縁の孫」から「地域の孫」へ……。視点をずらだけで，意欲を活かす可能性はあるはずだ。「次世代育成」という視点に立ち，シニア世代の人びとが地域の子どもたちの祖父母としてそのパワー活かす，という発想に転換できないだろうか。

そうすれば，支援の担い手はシングルの男女，子どもを持たなかった夫婦，仕事をリタイアした男性などにも広がる。子育て支援の重要性が叫ばれるなかで，血縁にとらわれない「地域の孫」としての視点から，シニア世代の子育て支援をとらえることが，今後いっそう重要になってくると思われる。

３．２　支援ボランティアの育成を

シニア世代が「地域の祖父母」として，そのパワーを活かす可能性は大きい。が，そのためには本稿でもとりあげた「子育て支援シニアボランティア講座」のような講座で学んでおくことが望ましい。しかし現在，各地で行われている講座は，子育て経験者向けのものが多く，内容も女性を対象として組まれているように思われる。

赤ちゃんを抱いたことがない，風呂に入れたこともない人を想定した講座の開設があってもいいのではなかろうか。ニーズがないから開かないのではなく，ニーズは創っていくものである。父親の子育て参加が叫ばれている現在，男性限定の「60歳からの子育て講座」なるものがあってもいい。

ただし，ボランティアを育てていくには工夫が必要だ。ひとつは，講座の修了者に活動の場を提供することである。意欲や能力があっても自ら活動の場をさがす，あるいは作っていくことは容易では

ない。加古川市のシニア子育てボランティアの活動が成功している大きな理由のひとつは，市が活動の場を約束し，場所を提供しているからである。

もうひとつ，ボランティアに負担をかけすぎないことも大切だ。「にこにこオープンルーム」のボランティアたちは，駐車場代など持ち出しでやっている人が少なくなかった。シニア世代の場合は，年金生活者が多数を占める。ボランティアだからタダで使って当たり前という発想では，人は育たないし活動も長続きしない。お金にはならないけれど，持ち出しにもならない。そんな配慮が行政側にも欲しいものである。

附　記

本稿は，平成16年度関西国際大学カウンセリング研究所プロジェクト研究（課題名：少子高齢化時代における地域の子育て支援に関する研究）補助金による研究成果の一部です。調査にご協力いただいた子育て支援ボランティアの皆様および加古川市子育てセンター職員の方々にあつく御礼申しあげます。

参考文献

1）㈶兵庫県長寿社会研究機構家庭問題研究所：『祖父母と孫のかかわりに関する調査研究報告書―祖父母の〈孫育て〉をめぐって』1994年3月

2）清水美知子：「祖父母と孫のつきあい方」『教育と情報』文部省大臣官房調査統計企画課498号 1999年9月

3）㈶兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所：『地域における子育て支援についての調査研究報告書』2003年3月

4）清水美知子：『〈孫育て〉をめぐる祖父母のライフスタイルに関する実証的研究』〔平成13－15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））〕研究成果報告書　2005年3月

Abstract

In this papaer, child care support by senior citizens will be considered, taking as an example, "Niko-niko Open Room", implemented in Kakogawa City. In Kakogawa, the Cild Care Consultation Center held a course of lectures for child care support volunteers in 2001. The target of the course was citizens sixty years old or older, with those finishing the course starting work as staff of the Niko-niko Open Room. Since April 2002, twice a month, the Niko-niko Open Room has provided infants and their parents with opportunities of various activities. The activities are joined in by dozens of parent-child pairs each time, and have had acquired favorable reputation. Through this example, this papaer will clearly explain the significance of senior citizens' participation in child care as volunteers, as well as give suggestions as to the direction child care support should be headed.